

【報告】

観光情報発信のための観光英語講座の役割と今後の課題

中西 廣

日本大学

要旨

The purposes of this paper were to consider the roles and the future possibilities of the tourism English courses in spreading attractive information about Aomori. The author was in charge of the course for beginners in March 2012. From the result of the consideration, the roles and the future possibilities should include the development of speakers who have knowledge of the regional culture and tourist sites.

1. はじめに

日本の祭や文化遺産など伝統文化に加え、漫画などのサブカルチャーを含めた日本特有の文化に対する外国人からの関心が高まっている。国土交通省観光庁の訪日外国人旅行者数及び日本人海外旅行者数の推移(2011)によると、観光目的で訪日する外国人は2001年では約4,772,000人であったのに2010年には約8,611,000人と10年間で約倍増した。それに伴い、観光業の重要性も年々高まっている。言語に焦点を当てると、実際に観光地で出会う外国人観光客は、言語コミュニケーション手段として国籍を問わず英語を使用するケースが多い。青森ねぶた祭や弘前さくらまつりで知られる青森県には、時期によって大勢の外国人観光客が訪れる。言語を含むサポート体制の構築が課題である。

ここでは、青森地域の観光情報発信のための英語教育について、青森公立大学で2012年3月に行った観光英語(初級)の講座概要を示しながら、青森に外国人観光客を呼び込むための観光情報発信力の向上を目的とした観光英語の役割と今後の課題を考えてみる。公開講座の受講者は、英語のブラッシュアップの機会としていたり、観光産業に身を置き、自身のキャリアアップを目的としたりしている。英語教育を文化発信という文脈の中で進めることは今後の観光産業への貢献と、日本の中で英語の一つの在り方を考えることになると思われる。

2. 講座概要

表 1 は講座概要をまとめたものである。なお、講座では、教科書として Angela Buckingham and Norman Whitney(2010) の Passport plus と講師作成の教材を使用した。

講義室には、椅子に小さな机が備えついていたため、それらを講師に対して U 字型に配置した。講師と受講生との距離を等間隔にすることによって受講生に対する公平性を保ち、講師と受講生、受講生同士のコミュニケーションが促進されるよう努めた。タスクにはストーリー性を持たせ、外国人を青森県でもてなす設定で、出迎え、観光地までの案内、観光地での日本文化の紹介を軸とした。

表 1. 観光英語講座の概要

	実施年月日	内容	Key phrase
1	2012 年 3 月 3 日(土)	Introduction Greeting people Asking about trips Suggesting means of traveling into town	Welcome to Japan. How was your trip? We'll take a taxi into town.
2	2012 年 3 月 10 日 (土)	Comparing methods of travel Asking and making recommendations Giving directions	It takes about 2hours. It costs 12,000yen. Turn right/left when you get to the bank.
3	2012 年 3 月 24 日 (土)	Talking about Japanese things Telling people what they must and must not do Questionnaire	Have you tried <i>Sushi</i> ? It means you have to leave your shoes here.

2.1 2012 年 3 月 3 日 第 1 回

第 1 回目の講座は、青森公立大学内で、午後 1 時より 90 分間おこなわれた。最初に、講師が自己紹介し、講義概要を説明した。講義に入り、Unit 1 の Background を Oral introduction として英語で説明した。Unit 1 での学習目標は、挨拶の仕方、旅行が快適かどうかの質問の仕方、交通手段について説明するための表現を学ぶ予定であったが、受講生である社会人の多くは今までにこれらの表現をいくつか学び、知っている可能性が高いと考えられた。したがって、単なる表現だけではなく、場面状況や年齢、相手との親密度や日本式と欧米式の挨拶の違いを説明することにした。加えて、ゲストを迎える際に地図やバスの時刻表

を準備しておくことや、簡単な連絡先を書いたカードを準備しておくこと等、直接的に語学には関係がないと考えがちであると思われる点についても説明をした。

その後、説明内容を受講者がどれほど理解しているかを確認するために、数問の Quiz を口頭で出題した。まず、説明の中で出てきた単語や表現をできるだけ多く答えてもらった。その後、それらを黒板に書き出し、語と語をつなげながら説明を繰り返し、目標や場面状況、挨拶表現に違いがあることを再度確認してもらった。その後は、挨拶の仕方や交通手段についての提案等に関し、Listening 問題、Key phrase の確認、また、それらを用いた会話練習等、2名1組で行ってもらった。

2.2 2012年3月10日 第2回

先回と同様の場所と時間で行われた。第2回講座では、公共交通機関を使用する際に必要な語彙の紹介や所要時間、料金の説明の仕方を講習の中心とした。ここでは、American English か British English かによって英語の表現法や数字の教え方が異なることも強調した。紹介したものの一部をまとめたものが表2である。教科書中には紹介されていなかったが、国や地域によって違いがあることを示した。講習後のアンケートでは、「American English を中心として学んできた日本人にとって、こうした違いを知ることは多様な英語の存在を知ることになり役立つ」と肯定的な回答を得ることができた。

表2. 講座中に紹介した American English と British English の違い(一例)

	American English	British English
往復切符	a round-trip ticket	a return ticket
100	one hundred	a hundred
1250	one thousand two hundred fifty	one thousand two hundred and fifty

また、以前に同様の講座を受講した経験のある受講生から「以前、English speaker の先生から区画(block)を数えて道案内する方法を教えてもらったが、青森では道路状況が違い、うまくできない。別の方法を教えて欲しい。」との要望を受けた。そのため、加えて日本と海外との道路や住所表示の違いを日本語で説明しながら、それを踏まえた道案内の仕方を英語で説明し、その後、口頭での練習を講師自作のエクササイズを用いて行った。

2.3 2012年3月24日 最終回

最終回は午後1時より60分間おこなわれた。天麩羅や寿司、御守りや御札など、日本食

や日本文化に関する説明、また、家の中では靴を脱ぐこと等、日本の慣習についても触れた。外国人に対してそれらを説明する際に必要と思われる語彙を紹介し、英語で代表的な日本食について説明する練習を、講師がクイズを出題し、受講生が代表者1名に説明して解答する形式でおこなった。その他、Phrase と会話もペアで練習した。最後には、コース評価のアンケートに回答してもらった。

3. 考察と今後の課題

コース評価のアンケート結果には、日本語と英語を併用して解説したことに対する肯定的な意見があったこと、他に否定的な意見がなかったことから概ね満足していただけたと推察する。受講生の「青森地域観光を盛り上げたい」、「外国人観光客をサポートしたい」という力強い意気込みに対して、大学の公開講座はさらに多くのサポートが可能であると思われる。

そのためには、観光情報を発信する力の向上を目指して、英語教育からのアプローチも必要と思われる。2010年12月4日に東北新幹線が延伸開業し、青森市内には新青森駅が開業した。これは観光産業にとっては非常に大きな変化である。交通利便性の向上は人の移動の長距離化を可能にする。宮城県や東京都といった大都市からの日帰り観光客を見込めるためである。また、成田空港等の国際空港からの外国人観光客を呼び込む可能性が開けてくる。しかし、外国人観光客は青森ねぶた祭りや弘前さくらまつり等、短期間に多く来訪する。この場合、宿泊先の予約や観覧席の確保に苦勞することになり、日本人が英語を使って外国人観光客をもてなす機会も増すだろうと思われる。河合(2011)によると、実際に青森ねぶた祭りでは宿泊先の確保が非常に難しく、諦めてしまう観光客も多くいる。従って、当日はもちろん、事前に情報発信する体制も必要である。新幹線で日帰りが可能なことや青森ねぶた祭を観覧後に八戸市や仙台市に宿泊できることを外国人に英語で情報発信できるようにすることも今後の教育課題だろう。

2点目に、青森地域に生きる日本人の英語話者育成が必要である。祭りの開催期間には文化情報に富んだ英語話者の活躍の場が非常に多い。英語の母語話者は、日本国内で、または日本文化については多くの場合、情報弱者となってしまう可能性が高い。観光英語講座の中で、講師は日本の文化と関連づけながら言語の知識と使用機会を提供しなければならない。さらに、受講生である日本人ならではの英語および外国文化に関する疑問点に理解を示しながら教えることが求められる。菅原(2011)によると、英語の母語話者は、日本語を母語とする英語学習者の苦勞をよく理解しないという。この点において、観光英語を日本人講師が担当する意義がある。今回の講座において、留学経験者の講師が外国との住所表示の違いを比較しながら日本の道案内について解説したことはその一例となろう。

公開講座の3点目の可能性は、より実践的なパフォーマンスを実社会の中で展開することである。中野(2010)によると、大学の学部生に対しても English for specific purpose (ESP) として観光案内についての授業が展開されている。公開講座では、例えば、青森の祭りの国内外への情報発信を産学協同でおこなえば、情報を相互補完して有効的な情報発信ができるだろう。鈴木(2010 や)鳥飼(2011)によると、日本における国際共通語または国際補助語としての英語は文化の発信・交流のために使用され、異文化との共生を果たしていくべきだとしている。見慣れた青森のまちを言語と観光という新たな視点から見直すために、フィールドワークによる学習の必要性もあるだろう。以上のことから、青森公立大学のような経営経済学部の単科大学において開講される外国語講座は、市民と青森公立大学とが互いに協力関係を構築し、地域文化・経済のアイデンティティを確立・保持するための役割の一部となり得るだろう。

以上、外国人観光客を、日本、特に青森県で観光案内する際の準備として、文化発信の文脈で考える時、英語教育の可能性について、社会人に英語を教える立場から考察を試み、今後の課題を考えた。今後も英語教育が実社会と結びつきながら更に充実し、日本の伝統文化・文明を堅持しながら日本人の手で大きな発展を遂げることは必要不可欠である。そのために英語教育を通して、日本・地域の文化情報発信に貢献し続けていきたい。

参考文献

- Angela Buckingham and Whitney. (2010). PASSPORT plus English for International Communication. Oxford: Oxford University Press.
- 河合清子(2010). 『ねぶた祭—”ねぶたバカ”たちの祭典』 東京:角川書店
- 国土交通省観光庁(2011) 『訪日外国人旅行者数及び日本人海外旅行者数の推移』 2011年2月1日更新 国土交通省観光庁 Homepage
http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html (2012年4月現在)
- 中野秀子(2010). 「観光案内プレゼンテーションを目指す ESP」 大学英語教育学会監修 寺内一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島茂編『英語教育学大系 第4巻 21世紀のESP 新しいESP理論の構築と実践』 東京:大修館書店
- 菅原克也(2011). 『英語と日本語のあいだ』 東京:講談社
- 鈴木孝夫(2010). 『日本人はなぜ英語ができないか』 東京:岩波書店
- 鳥飼玖美子(2011). 『国際共通語としての英語』 東京:講談社